



あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

No.36

美瑛町の事例

―丘のまちびえいのさらなる飛躍をめざして―

美瑛町は、「丘のまちびえい」と呼ばれている。十勝岳連峰の裾野に広がるなだらかな波状丘陵地帯に広がる畑作地が美しい田園風景を創出し、雄大で緑豊かな自然景観、農村景観が観光のスポットとして人気を集めている。そこには、先人たちが弛まぬ努力と創意で拓いた豊かな大地に、農業と文化が育った魅力あふれるマチがある。

平成十一年（一九九九年）に

開基一〇〇年を迎えた美瑛町は、大雪山国立公園と夕張山系に挟まれた北海道中央部に位置している。周囲は、東に上川町、東南に十勝岳を隔て新得町、西南に上富良野町、西に中富良野町及び芦別市、西北から北に旭川市、北東から東に東神楽町及び東川町と二市六町村に隣接している。総面積六七七・一六km²を有し、上川支庁管内では上川町、旭川市に次ぐ大きな面積となっている。

交通網は、旭川から富良野を経由して浦河に至る国道二三七号線と、現在建設中の旭川から夕張に至る国道四五二号線、旭川から富良野に通ずるJR富良野線が美瑛町を通過している。美瑛町への交通アクセスは、国道を利用する場合は旭川から美瑛市街までは車で約三〇分（二四km）、バスで約五〇分、JRで三二分である。旭川空港からはバスで二二分（二〇・六km）の近さにある。

美瑛町の人口は、一一、九〇二人（平成十二年国勢調査）、就

業人口別では農業を主とする第一次産業就業者数が二、〇二七人（三二・七％）、鉱業、建設業、

そして製造業の第二次産業一、一三〇人（一一・三％）、観光と関係が深いサービス業の第三次産業が第一位の三、〇二八人（四九・〇％）となっている。

美瑛町の基幹産業は「農業」と「自然と農業がおりなす景観をベースにした観光」であるといえる。平成十三年の観光客の入り込み数は一二六万人である。

観光資源は、大雪山国立公園の雄大な自然に囲まれた白金温泉と素朴で広大な丘陵の大地の田園風景の他、「丘のまちびえい」を世に知らしめた風景写真家の故前田真三氏の作品を展示している拓真館、丘をテーマにした祭りやイベントなどである。

美瑛町農業の概要

次に美瑛町の基幹産業の農業について概観する。

町内の地勢は、おおむね波状丘陵で畑のほとんどがここにあり、その丘陵をぬって美瑛川、置杆牛、宇莫別川、辺別川ほか数条の河川が流れ、その流域が水田となっている。

気象は、内陸的で寒暖の差が著しい。農耕期間（五月一日から九月三〇日まで）の積算温度は二、四三七・四℃、降水量四一〇・〇mmで、農耕には恵まれている。

耕地面積は、一一、七〇〇畝で田二、三三〇畝、畑一〇、四〇〇畝、うち普通畑九、一七〇畝、牧草地一、二二〇畝、樹園地一五畝となっている。

農家戸数は一貫して減少し続け、平成十二年は、農家戸数六

三五戸うち主業農家五四七戸（八六・一％）である。

耕地面積規模は、中心階層が二〇畝以上二一九戸（三四・五％）、次いで一五〜二〇畝層一二九戸（二〇・三％）である。

しかし、一五畝未満の農家も四五・二％を占めており、丘のまち美瑛町は、畑作農業のまちとイメージされがちであるが、一戸平均耕地面積は必ずしも大きくはない。

したがって、野菜を導入し複合化による経営安定化を図っている農家が多く、立地条件が比較的良いことから作物の種類も多いという特徴がある。農作物は、水稲、豆類、馬鈴薯、甜菜及び麦類を主にしているほか、大根・アスパラ・スイートコーン・人参・カボチャ・トマトなどの野菜がこれを支え、酪農、肉用牛、養豚も堅調な展開を見せている。（表一）

農業産出額は、一一二〇億円で推移しており平成十三年時点で一、二六五千万円（耕種部門九九四千万円 七八・六％、畜産部門二七二千万円 二二・四％）である。（表二）

美瑛町の農業の特色とサポート機関

1 土づくり実践のまち

前述のとおり美瑛の農業は、恵まれた気象条件のもとに畑作農業を中心に北海道農業の縮図といわれるほど多くの作物が作付けされている。十勝型や斜網型畑作とは異なって急峻な土地条件と相対的に小さい面積をもつて展開する美瑛畑作の最も重要なポイントが、地力維持と畑作生産力の向上である。そのために、美瑛町では、関係機関あ

表1 主要農作物の作付動向

(単位：ha)

年次	1998年 (平成10)	1999年 (平成11)	2000年 (平成12)	2001年 (平成13)	2002年 (平成14)
作物名					
水稲	1,080	1,060	1,030	996	975
小麦	2,820	2,650	2,730	2,500	2,440
大豆	252	196	268	246	257
小豆	972	1,070	1,030	1,160	1,100
いんげん	186	161	162	164	169
甜菜	1,190	1,200	1,220	1,140	1,200
馬鈴薯	1,390	1,300	1,300	1,310	1,290
野菜					
大根	267	260	258	247	238
人参	137	130	124	122	119
アスパラガス	203	199	196	189	185
白菜	25	24	23	15	14
キャベツ	83	76	72	71	61
タマネギ	23	21	21	18	18
メロン	15	13	12	9	9
カボチャ	122	125	121	114	118
トマト	15	15	15	17	20
スイートコーン	249	271	221	251	258
青刈りトウモロコシ	409	357	332	280	310
牧草	1,550	1,820	1,680	1,680	1,660

資料：北海道農林水産統計年報（農業統計市町村別編）

表2 農業産出額の推移

(単位：1,000万円)

年次	1997年 (平成9)	1998年 (平成10)	1999年 (平成11)	2000年 (平成12)	2001年 (平成13)	
作物・部門名						
耕種	米	161	139	145	136	126
	麦類	132	205	79	134	113
	雑穀・豆類	78	110	108	99	111
	いも類	211	200	212	217	208
	野菜	277	308	291	278	281
	果実	2	3	2	3	2
	花き	1	1	1	0	0
	工芸作物	115	136	81	102	124
	種苗・苗木類・その他	23	26	41	35	28
計	1,000	1,128	960	1,004	994	
畜産	肉用牛	59	66	61	63	52
	乳用牛	164	167	165	164	174
	(うち生乳)	(150)	(153)	(151)	(144)	(147)
	豚	50	51	48	42	45
	鶏	0	—	—	—	—
	その他	1	1	1	1	1
計	274	285	275	269	271	
農業産出額	1,274	1,413	1,235	1,273	1,265	

資料：北海道農林水産統計年報（農業統計市町村別編）

けて「土づくり対策」に力点を
おいた取り組みが行われている。
ここでは、美瑛町内で先駆けと
なった北瑛パーク堆肥生産組合
の活動と全町的取り組みの現状
を紹介する。

置する。北瑛地区は、畑作専業
地帯で農業構造改善事業による
大型機械化と機械化農業に向け
た土地基盤整備、なかでも層圧
調整事業による傾斜改良によっ
て、一部に土壤踏圧の問題を表
面化させた。

北瑛パーク堆肥生産組合の活動
土づくりによる作物単収の効
果を実証したのが昭和五十九年
(一九八四年)に設立された北
瑛パーク堆肥生産組合の活動で
ある。北瑛地区は、JR富良野
線をはさんだ西側の丘陵部に位

問題解決には堆肥投入による
地力回復と土壤の膨軟化を達成
し、あわせて輪作体系の確立を
図る必要があった。これらの課
題に取り組むために地区内の二
八戸(耕作面積四九〇畝)によ
り設立されたのが北瑛パーク堆

肥生産組合である。

パーク堆肥生産組合は、堆肥
の製造・散布による土づくりを
行うとともに、生産技術の向上
を図るために土づくり研修会へ
のメンバー派遣や堆肥の状態や
作物の生育状況を点検する現地
研修会、土壤診断による勉強会、
さらに、多収穫共励会を開催し
成績上位者を表彰し、その取り
組みを発表するとともに全戸の
データを公開するなど相互の情
報交換を活発に行った。こうし
た堆肥投入と技術情報の伝達・
交換が精力的に行われて技術水
準の向上をもたらした結果、北
瑛地区が美瑛町内で高い収量水
準を実現したといえる。

全町をあげての土づくりへの 取り組み

欠であるとの共通認識のもとに
美瑛町では、平成元年(一九八
九年)から本格的に「土づくり
対策」に取り組んでいる。
取り組みの内容は、最初に堆
肥づくりのための堆肥盤の整備、
堆肥散布機の導入を行い、堆肥
散布機については平成九年に町
内をほぼカバーできる台数の配
置を完了、同時に、堆肥導入のた
めの運搬費と緑肥種子代への助
成を行った。また、土づくり講習
会の開催、土壤診断の推進や町
内の有機物存在状況の調査や土
壤マップ作成を実施している。
平成十二年には、農業技術研
修センター「みのり」を開設し
最新鋭の土壤診断機器を導入し、
土壤診断システムを充実。
平成十三年からは、土づくり
を加速するために一〇%緑肥運
動を実施し緑肥種子代のほか
に肥料代に対する助成も行っ
ている。



堆肥撒布作業

さらに、平成十五年に土づくりを通じた生産者の組織化を強力に推進するため、町、JAにより美瑛町農業支援センターを設置した。

2 美瑛町農業の

サポート機関

つぎに、美瑛町農業を強力にサポートしている前出の農業支援センターと農業技術研修センター「みのり」の取り組みを紹介する。

(1) 農業支援センター

オープンは、昨年（平成十五年）の七月末である。支援センターは、土づくりの推進を主要業務に位置付け、さらに、新規就農を含めた担い手対策の推進、その他総合的な相談窓口などの業務を町、JAから派遣された四人の職員が担当している。

平成十六年度の「土づくり推



農業支援センター開所式

進支援」では、緑肥導入、堆肥の運搬支援、堆肥散布組織化モデル事業、全圃場土壌診断推進事業、圃場調査とそのマップ化などを計画している。

「担い手育成支援」では担い手総合推進事業として、短期研修生の研修斡旋事務、新農業者の一年間の研修制度への対応、新規就農者への支援事務のほか、各種研修会や、新規就農希望者の育成・定着支援を行っており、研修生などを受け入れるための宿泊施設も完備している。

さらに、総合的

な相談窓口や町内に二つあるコントラクター組織の育成や農繁期における農業調整を行うサポートセンターの可能性の調査検討業務を担当している。

(2) 農業技術研修センター

施設

農業技術研修センター「みのり」は、平成十二年二月に農地の維持増進に欠かせない土壌診断や農業者の農業情報の交換のための研修の場、農畜産加工体験の場、農業を通じた町民の交流の場として建設された総合営農指導拠点施設である。隣接地に、試験圃やJA等の育苗ハ

ウスが広がる。

土壌分析室では、ICP自動発光分析装置や自動元素分析装置などの最新鋭の分析装置を導入して、健全な作物づくりと収量の増加に欠かせない圃場内の土の養分などを分析し、生産者への確かな指導を行っている。

研修室は、スライドやビデオプロジェクトなどの視聴覚機器を用いた研修にも対応でき農業情報の交換の場として、各種研修会・講習会・技術交換など多目的に活用している。

加工研修室は、地場の農畜産物を原材料にした特産品の開発や体験製造のために三つの加工室がある。

第一加工室は米や大豆などを原材料に味噌・豆腐などの加工品の製造ができる。

第二加工室は小麦（粉）を原材料にしたパンやうどん、馬鈴薯を原材料にしたコロッケ、ト



みのり建物全景

マトなど野菜を原材料にしたジューズなど汎用性の高い加工室で缶詰や瓶詰め、急速冷凍や真空保存なども行える。

第三加工室は、牛乳を原材料にしたチーズやアイスクリーム、ヨーグルトなど主に乳製品の加工体験ができる。

隣接地の試験圃では、四・五鈴の畑にスイートコーン、アスパラ、大根、トマト、百合根や馬鈴薯、麦の品種栽培試験（生食及び加工用）を行っている。

育苗ハウスではアスパラの育種やトマト・キャベツ他の育苗も手掛けている。

さらなる飛躍を目指して

ここでは、農業振興の柱となる「JAびえいの第七次農業振興計画」と女性農業者のネットワークである「ネットワークす

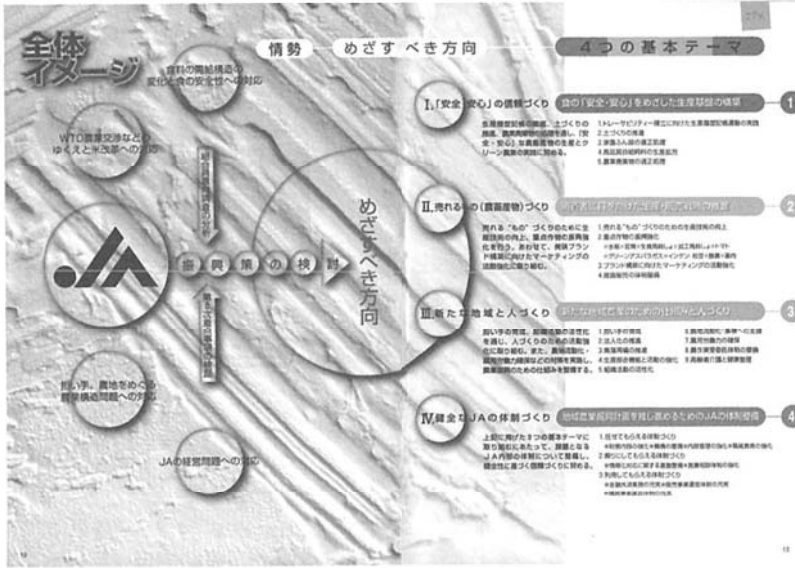
ずらん」の活動や三月一日に道から認証を受けて正式に発足した「NPO法人びえい農観学園」の事業内容に触れる。

さらに、町民が主体的にまちづくりに関わることが出来る社会づくりのルールを定めた「住み良いまち美瑛をみんなで作る条例」と「美瑛の美しい景観を守り育てる条例」を紹介する。

1 JAびえいの第七次 農業振興計画

JAびえいは、総合的な生産性の拡大を目指して昭和五十五年度の第一次計画をスタートとして地域農業振興計画を策定しており、今年から第七次中期五年計画（平成十六年度～平成二十年度）を実践する。新計画の策定には、当研究所が策定支援を行った。

策定にあたっては、JAプロ



J A 農業振興計画 全体イメージと4つの基本テーマ

ジエクトチームが主体となり、組合員は勿論のこと関係機関の合意形成を十分に図りながら取り進めている。JAのプロジェクトメンバーをサポートする地域農研側のメンバーは、チームリーダーとして農業経営問題のエキスパートである札幌大学の長尾正克教授、農地問題の第一人者の北海道東海大学の谷本一志教授、全道の畑作経営に精通している北海道農業研究センター農村システム研究室長の天野哲郎氏と地域農研のスタッフ三名でチームを編成した。

新計画は、前計画の検証と組合員意向調査結果、社会経済状況や農業情勢等を踏まえて課題を整理し、解決の方策について議論を重ね目指すべき方向として、「新たな地域と人づくり」「健全なJAの体制づくり」とした。そして「信頼から大地に活づく確かな絆へ」をスロ

ーガンとし、四つの基本テーマを設定した。さらに、基本テーマごとに重点事項を定め、併せて、取り組みの主体性と責任を明確化するために、担当部署、組合員およびJAの行動計画などを示している。なお、四つの基本テーマは、①食の「安全・安心」を目指した生産基盤の構築②消費者に目を向けた生産・販売戦略の推進③新たな地域農業のための仕組みと人づくり④地域農業振興計画を推し進めるためのJAの体制整備である。

2 ネットワークすずらんの取り組み

「ネットワークすずらん」は、美瑛町内で地産地消のための直売活動や農畜産物の共同加工や農村景観づくりなどに積極的に取り組んでいる女性農業者グル



宮様国際スキーマラソン交歓会

ープのネットワーク組織である。平成九年に組織され現在、町内の一〇グループ（五九名）が参加している。

農畜産物の加工では、前述の技術研修センター「みのり」の農畜産加工研修室やJAの加工センターを利用し、地元農畜産物を原材料としたの加工品の開発と商品化に取り組んでいる。

グループのひとつである沢の村ウバクベツは、お菓子やパンの商品製造のために自前の加工場を建設するまでになっている。

商品化した味噌、チーズ、豆腐、豆類の缶詰、パン、トマトジュース他は、グループで設置している直売所や町内の各種イベントで新鮮な農畜産物やドライフラワーやおし花、とうぎび人形などとともに販売し好評を得ている。

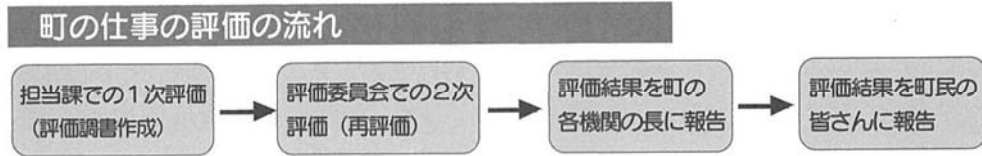
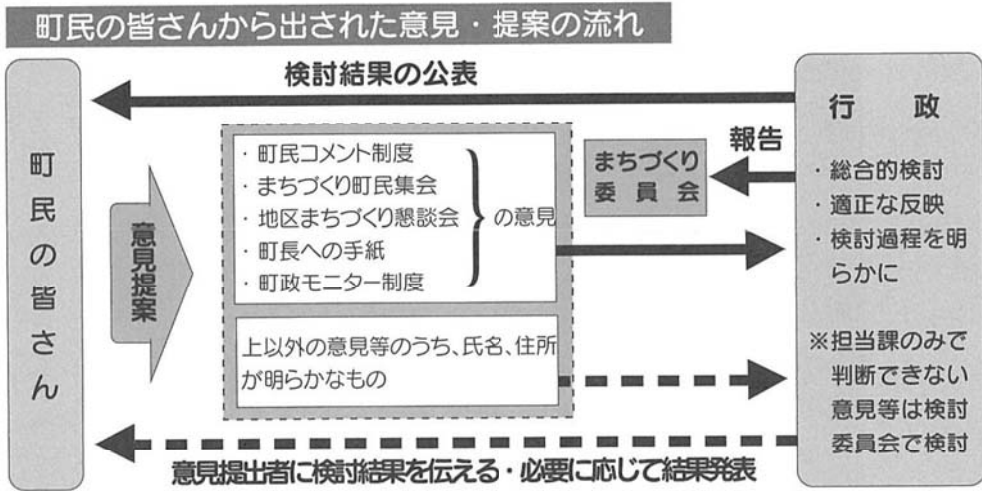
また、毎年二月に美瑛町で開催されている宮様国際スキーマ

ラソン大会（今年で二七回）の交歓会に「ネットワークすずらん」のメンバーが美瑛産の農畜産物を原材料として調理・加工した南瓜パンやチーズ、ソーセージ、かぼちゃ・いもだんご、豆腐のみそ汁など自慢の品を提供し好評を得るとともに「ネットワークすずらん」の活動を広くアピールした。

このほかにも、普及センターや町の支援を受けた農場看板づくり講習会、女性の起業活動のノウハウを学ぶための研修会の開催や視察研修、上川管内、全道のネットワークグループの交流など活発に事業を展開中である。

なお、メンバーグループが商品化した手作り味噌が平成十六年度から町内小中学校の給食に使用されることになった。このことは、大きな成果の一つでありメンバーの励みとなっている。

◎図1 町民の意見提案の流れと町の仕事の評価の流れ



**3 NPO法人
びえい農観学園**

本年(平成十六年)三月にNPO法人びえい農観学園が道の認証を受け正式にスタートした。平成十三年に地域の資源を守り活かし、地産地消運動や美しい村づくりによる地域おこしを目指すため始まった住民の活動を契機に誕生した組織である。

今年から本格化させる事業は、美瑛町の基幹産業である農林業と商工業や観光の連携のしくみづくり事業、地域産業の活性化と産業を支える人材育成事業、地場産農畜産物を普及させるふるさと市場の開設や特産品の開発、郷土料理普及イベント開催さらに、農村体験観光・修学旅行の受け入れなど幅広い内容になっている。

美瑛町の自立的発展に向けた地域づくりの核となる組織とし

**4 次世代へつなぐ
まちづくり**

美瑛町では、平成十五年から「住み良いまち美瑛をみんなで作る条例」と「美瑛の美しい景観を守り育てる条例」を施行した。

いづれの条例も美瑛町のまちが自らの活動により、もっと生き生きと楽しく住み良いまちにするため、平成十二年から住民が主体となった検討会を立ち上げ町民アンケート調査や意見交換会を実施しまとめあげたものである。

(1) 住み良いまち美瑛をみんなで作る条例

四月に施行した「住み良いまち美瑛をみんなで作る条例」は、美瑛をもっと住み良く、住んでいる人が誇りを持てるまち

て、NPO法人びえい農観学園の活動を大いに注目したい。

にするため、町民が行う公益活動を推進し、また、「役場の仕事」についての情報を提供して町民からの意見、提案を募集し、まちづくりに反映していくというルールを定めたものである。

具体的には、

①知らせる。…審議会等の公開と議事録の公表や行政情報の積極的提供

②意見の把握に努める。…町民コメント制度、まちづくり

町民集会、地区まちづくり懇談会、町長への手紙、町民モニター制度等

③意見の反映に努める。…ルール（条例）に基づきまちづくりを行う。検討結果の公表と意見が反映できない場合は役場が「説明責任」を果たす。

④適正な評価をする。…町の仕事についての適切な評価を行い、その結果を公表する。

⑤町民の公益的な活動を支援す

る。…地域や団体が行う公益的な町民活動を促進するため、情報提供など必要な支援を行うといった内容である。

☆図1 フローチャート：「町民の意見提案の流れと町の仕事の評価の流れ」参照

(2) 美瑛の美しい景観を守り

育てる条例

周知期間を経て七月に施行した「美瑛の美しい景観を守り育てる条例」は、美しい景観が町民みんなの財産との総意のもと、一人ひとりが景観づくりの担い手となり、みんなが協力して美しい景観や豊かな自然に囲まれた生活の中で、郷土を愛する心を育み、それらを次の世代に引き継ぐことで、いつまでも住み良い全国に誇れる魅力ある町であり続けることを願う思いが条例に込められている。

置を講じるなどの内容である。

あとがき

美瑛は、北海道農業の縮図といえるほど幅広い農畜産物の供給基地であり、土づくりへの地まぬ努力が生産力の増進と高品質で安心できる農畜産物を産みだしている。

また、「丘のまちびえい」と呼ばれ全国的に知られた観光地であるが、その観光のベースに農業がある。まさに、農業と観光が産業の柱である「試される大地北海道」のモデル町村である。美瑛には、基幹産業の農業と観光を発展させる確かな動きがあり、今回紹介した取り組み事例が「丘のまちびえい」のさらなる飛躍のための起爆剤となることを願ってやまない。

レポーター 地域農研

研究部次長 中谷 隆